

平成25(2013)年度
授業評価アンケート
分析報告書

平成27年1月
國學院大學

授業評価アンケート分析報告書の刊行に際して

國學院大學教育開発センター委員会 委員長

加藤季夫

全国の大学が2018年度以降の生き残りをかけて様々な改革に取り組んでいる。「実学の大学」とコマーシャルを大々的に行い、就職率の高さを売り物にし、保護者にアピールする戦略をとっている大学も少なくない。冷静に考えてみれば、「すぐに役立つ知識」は「すぐに役立つ知識」と同じであり、「すぐに役立つ知識」しか持っていない学生を採用した企業等の行く末は目に見えているといっても過言ではない。大学の最も重要な役割は多面的な視点を持った人材の育成であり、さまざまな情報・知識を基に物事が判断できるような能力を身に付けさせ、未知の事柄にも対応できる学生を社会に送り出すことである。このような視点に立てば、大学教員のあるべき姿は明白で、良質な授業を如何に学生に提供できるかが、大学の生き残りを決めることになるといえる。これから考えれば「ゼミの大学」は極めて良心的であり、他大学ではあるがお薦めの大学といえる。

それでは良質な授業とはどのような授業なのか。理想的にはワクワクして受講でき、関連する事項を主体的に調べ、活発に討論できるようになる授業といえる。しかしながら、多くの学生を抱える私立大学では300人を超える大人数授業も多々あり、全てを前記のような授業にするわけにもいかないのも現実である。また、どれも当てはまらず、学生からの評価が著しく低い授業も少なからずあることも確かである。教員が担当する授業を学生たちがどのように感じているか知り、積極的に授業改善を図るためには「授業評価アンケート」はやはり不可欠で、アンケート結果は教員個人だけでなく、学部・学科も組織として積極的に利用すべき重要な情報といえる。どの大学でも教員採用時に模擬授業を課すようになってきたが、自分の授業の良し悪しを他の教員に評価されることをしてこなかった教員はまだ多い。各学部・学科等で、アンケートでの評価が高い授業および評価が著しい低い授業の担当教員の模擬授業を所属する教員全員の参加のもとで行い、意見を忌憚なく出し合うことができるようになればアンケートを行っている意味もあるといえる。

本学では様々な情報は公開することとなっている。この分析報告書も本年度からは大学のホームページを通して公開する運びとなり、担当教員だけでなく、学生や保護者、一般の人でも閲覧が可能となった。この分析報告書を読み、お気づきになったことがあれば、ぜひ、教育開発センター委員会にご連絡いただければ幸いです。また、本分析報告書の刊行に際してご尽力いただいた教職員の方たちには、厚く御礼を申し上げます。

はじめに

教育開発センター

本報告書は、平成 25 (2013) 年度に実施した「学生による授業評価アンケート」の結果について統計・分析を行ったものである。「全体分析編」「学部・学科・諸課程別分析編」の全編について、統計・分析を一括して委託業者に依頼し、各学部教育開発センター委員及び教育開発推進機構において内容確認を行った。

以下、アンケートの方向性、および留意点について解説する。

[1] アンケート用紙の改定について

平成 24 年度アンケートにおいて設問及び用紙のレイアウトを大幅に改訂し、かつ、全学共通設問 9 問に加えて、学部別設問最大 3 問を設定したが、平成 25 年度はその設問項目を踏襲した。ただし、委託業者との検討を経て、用紙のレイアウトについては以下の改訂を行っている。

第一に、回答方式をマークシート方式から記入式に変更した。これは委託業者の集計方式が手作業 + パンチ入力によることに合わせたためである。

第二に、設問項目を「1. この授業についてお聞かせください」「2. あなた自身についてお聞かせください」「3. この欄は教員の指示に従ってください」の 3 つの大項目ごとに分類した（結果として、設問の順序と設問番号に変更が生じた）。これは、従来の設問の配置の仕方においては、「教員および授業に対する、学生からの評価に関わる設問」と、「理解度・満足度・参加の度合いに関する、学生の自己評価に関わる設問」とが混在するかたちになっていたため、両者をグループ分けすることで、回答する側と集計結果を閲覧する側の双方にとって、設問の意図・観点が理解しやすくなるよう配慮したことによる。

第三に、アンケート実施の際に用紙の取り違えが生ずる可能性をより減ずるため、用紙色を若干変更した。24 年度は、ブルー（法学部）・グリーン（文学部）・オレンジ（人間開発学部）・ピンク（教養総合・経済学部・神道文化学部）の 4 色のインクで白色の用紙に印刷していたが、白地にカラーインクによる印刷では文字の視認性が低くなりがちであることに鑑み、25 年度はインク色を黒に戻した上で、用紙それ自体の色をブルー（法学部）・グリーン（文学部）・オレンジ（人間開発学部）・白（教養総合・経済学部・神道文化学部）の 4 種とし、また用紙の最上部に色名を白抜きで印刷するなど、識別をより容易にした。

各々の具体的な設問項目については、巻末に収録したアンケート用紙サンプルを御覧いただきたい。また、学部ごとに設問番号が異なることから、相互比較を行う際に設問番号の違いが問題となるが、この点については、p.6 に対照表を掲載しているので、適宜参照していただきたい。

本報告書では、全学共通設問 9 問分を中心としつつ、学部別設問についても集計及び他の設問項目との相関分析を行っているが、以下の解説では主として共通設問から見て取れる傾向について述べることとする。

[2] 分析の観点について

平成 18 年度実施分～21 年度実施分では「この授業を履修してよかったですか」との総合満足度を問う設問を主軸として分析を行い、平成 22 年度実施分より「この授業を理解できましたか」との全体理解度を問う設問を主軸として分析を行って来たが、24 年度実施分より、全体理解度・総合満足度両方の分析を掲載している。25 年度分析報告書の形式は、24 年度報告書を踏襲した。

[3] 留意点及び注目点について

全体理解度・総合満足度の数値の推移 (p.12 参照)

全体理解度（設問「この授業を理解できましたか」に対する回答）

	かなりそう思う	そう思う	あまりそう思わない	思わない
平成 22 年度	30.1%	55.2%	12.0%	2.8%
平成 23 年度	32.6%	55.5%	9.9%	2.1%
平成 24 年度	30.9%	55.8%	11.0%	2.2%
平成 25 年度	32.3%	55.5%	10.5%	1.8%

総合満足度（設問「この授業を履修して良かったですか」に対する回答）

	かなりそう思う	そう思う	あまりそう思わない	思わない
平成 22 年度	42.8%	47.9%	7.0%	2.4%
平成 23 年度	46.4%	45.7%	6.0%	1.9%
平成 24 年度	44.2%	47.0%	6.7%	2.0%
平成 25 年度	48.0%	43.8%	6.3%	1.9%

全体理解度については、学生の回答傾向は「かなりそう思う」「そう思う」の合計が 85%を超えている点において、4年間を通じてほぼ変わらない状況である。平成 24 年度は平成 23 年度に比して「かなりそう思う」の回答が 1.7 ポイント減少したが、25 年度は 23 年度とほぼ同水準に復した。

総合満足度については、学生の回答傾向を見るに、「かなりそう思う」「そう思う」の合計が平成 22 年度以降 90%以上を維持しており、総じて良好な状況であると言える。ただし、24 年度には、全体理解度と対比すると、学生の「理解できた」という達成感と、「履修して良かった」という満足感との間にやや開きが見られる点が注目されたが、25 年度もその傾向に大きな変化はない。

学生の意欲に関する数値の推移（p.12 参照）

授業への意欲的な取り組み姿勢（「予習・復習をするなど授業に意欲的に取り組みましたか」）

	かなりそう思う	そう思う	あまりそう思わない	思わない
平成 24 年度	21.7%	49.9%	24.1%	4.4%
平成 25 年度	24.6%	46.8%	24.4%	4.2%

平成 24 年度に設問項目の改訂を行った際に設けられた、学生の授業に対する取り組みのありようを問う設問（「予習・復習をするなど授業に意欲的に取り組みましたか」）について、2 年間の数値の推移は上に掲げた通りである。p.8 の全体講評でも指摘されている通り、「あまりそう思わない」「思わない」の合計（ネガティブな回答）が、連続して 30%近くに達している。他の設問項目ではネガティブ回答が最大でも 15%に留まっているのに対して、明らかに大きな数値であり、原因の解明と対策の検討が求められるところである。

その一方で、設問「教員は意欲的に授業を進めていましたか」において問われている、教員側の意欲（学生の受けた印象）について見れば、「かなりそう思う」「そう思う」の合計が例年 90%を超えており、25 年度も 96.7%に達している。例年 9 割という高い数値については、主張の控えめな学生による多少の「サービス」的な回答が一定程度含まれている可能性もあるが、それを差し引いても、学生側としては、個々の教員がかなり意欲的に教育活動を行っているという印象を受けていることは確かであろう。しかし、如上の数値からは、学生たちが教員の熱意を感じているにもかかわらず、学ぶ側の意欲がそれに呼応していないケースが少なからず存在することが推定される。何がそのような結果を引き起こしているのかについて、よりきめ細かな観察と分析が必要となろう。

全体理解度・総合満足度との相関分析（pp.90-98 参照）

各項目の相関係数を通覧したところ、以下の特徴が見られた。

第一に、全学共通設問について、「教員の話や指示は明確で聞き取りやすかったですか」「板書や教材は理解の助けになりましたか」「教員は意欲的に授業を進めていましたか」に対する回答に高い相関が見られた。また、「この授業を履修して良かったですか」との間にもやや高い相関が見られた。

第二に、全学共通設問について、「この授業を理解できましたか」「授業のテーマへの関心が高まりましたか」「この授業を履修して良かったですか」に対する回答に高い相関が見られた。

p.8の全体講評でも指摘があるとおり、以上の相関関係からは、教員側からの働きかけと学生側における理解・満足・関心の高まりとの間には強い関係があることが見て取れる。また、学生が教員の意欲を実感できるかどうかは、話や指示の明確さ、板書や教材の工夫の在り方によって大きく左右されることが分かる。換言すれば、授業や教員に対する学生の印象に、授業の技術的な面での改善・工夫が少なからぬ影響を及ぼすものであることが示されたかたちである。なお、このような関係性は、24年度の分析報告書でもある程度見られたが、25年度の分析結果ではより色濃く現れている。

第三に、法学部(用紙色ブルー)の学部別設問について、「この授業を受けて、知識や能力が増大したと思いますか」「授業のテーマへの関心が高まりましたか」「この授業を履修して良かったですか」に高い相関が見られた。また、これらの設問は全学共通設問の「この授業を理解できましたか」とも高い相関が見られた。

第四に、人間開発学部(用紙色オレンジ)の学部別設問について、「この授業は指導者の資質を備える上で役に立ったと思いますか」「授業のテーマへの関心が高まりましたか」との間に高い相関が見られ、またこれらの設問は全学共通設問の「この授業を履修して良かったですか」とも高い相関が見られた。

以上の傾向は24年度の分析結果でも同様に見られたものであり、授業の目標を達成出来た、スキルが向上したという自覚が、理解度の向上に伴って高まっていること、それが授業全体に対する満足感にも繋がっていることが看取される。

なお、昨年度に引き続き、クロス集計・コレスポネンス分析を通して、設問間の相関を視覚的に表示する試みを行っている(pp.101-114)。

クラス規模別評価(pp.115-116参照)

各設問項目の回答をクラス規模別(50名未満・50名以上100名未満・100名以上200名未満・200名以上300名未満・300名以上)に集計している。平成24年度は、ほぼ全ての項目において、「かなりそう思う」と「そう思う」を合計した肯定的回答の割合が、クラス規模が大きくなるに従って減少することが、かなり顕著に現れた。ことに講義の聴き取りやすさと、板書・教材の理解についてはクラス規模に影響される度合いがより大きい。

平成25年度もおおよそ同様の傾向が出ており、一般に少人数の授業では教育効果が高まることが明らかである。ただし、24年度と異なり、300名以上のクラスにおける評価が、200名以上300名未満のクラスにおける評価と同等、もしくはやや高くなる傾向が全般的に見られる。特に全体理解度・総合満足度において共通してその傾向が見られるが、いかなる要因がそこに働いているのかについて、改めて検討する必要がある。

その他、学部・学科・諸課程別の分析については、p.117以降を御覧いただきたい。

以上

巻頭言(授業評価アンケート分析報告書の刊行に際して)

はじめに.....	1
目次.....	4
前付:設問番号について.....	6
全体分析編	
全体講評.....	8
I. 回答者プロフィール.....	10
II. 授業アンケート集計.....	12
III. 学部(回答者所属)別構成比.....	13
IV_1. 全体理解度評価	
1. 開講場所・開講時期別.....	19
2. 学部(回答者所属学部)別.....	19
3. 学科(回答者所属学科)別.....	20
4. 学年別.....	21
5. クラス規模別.....	21
6. 科目(授業科目の区分)別.....	22
IV_2. 総合満足度評価	
1. 開講場所・開講時期別.....	23
2. 学部(回答者所属学部)別.....	23
3. 学科(回答者所属学科)別.....	24
4. 学年別.....	25
5. クラス規模別.....	25
6. 科目(授業科目の区分)別.....	26
V_1. 学部(回答者所属)別理解度評価	
1. クラス規模別.....	27
2. 時限別.....	28
3. 学年別.....	29
4. 曜日別.....	30
V_2. 学部(回答者所属)別満足度評価	
1. クラス規模別.....	31
2. 時限別.....	32
3. 学年別.....	33
4. 曜日別.....	34
VI. 学部別科目ベスト	
1. 理解度.....	35
2. 満足度.....	39
VII_1. クラス規模別科目集計一覧(理解度)	
・日本文学科必修/選択.....	43
・中国文学科必修/選択.....	45
・外国語文化学科必修/選択.....	46
・史学科必修/選択.....	47
・哲学科必修/選択.....	48
・法学部必修/選択.....	49
・経済学部必修/選択.....	51
・神道文化学部・専攻科必修/選択.....	53
・初等教育学科必修/選択.....	55

・健康体育学科必修／選択	56
・子ども支援学科必修／選択	57
・教養総合言語／講義／演習／実技	57
・教職課程	62
・図書館学課程	62
・博物館学課程	63
・社会教育主事課程	63
・別科必修	63
VII_2. クラス規模別科目集計一覧(満足度)	
・日本文学科必修／選択	64
・中国文学科必修／選択	66
・外国語文化学科必修／選択	67
・史学科必修／選択	68
・哲学科必修／選択	69
・法学部必修／選択	70
・経済学部必修／選択	72
・神道文化学部・専攻科必修／選択	74
・初等教育学科必修／選択	76
・健康体育学科必修／選択	77
・子ども支援学科必修／選択	78
・教養総合言語／講義／演習／実技	78
・教職課程	83
・図書館学課程	83
・博物館学課程	84
・社会教育主事課程	84
・別科必修	84
VIII. 専任・兼任別順位	
順位の算出方法	85
1. 理解度順位	86
2. 満足度順位	88
IX. 相関係数(学部別)	90
X. 科目区分別 平均値・最高値・最低値	99
XI_1. 理解度からみた各項目の評価(項目間クロス集計・コレスポンデンス分析)	101
XI_2. 満足度からみた各項目の評価(項目間クロス集計・コレスポンデンス分析)	108
XII. クラス規模別評価	115
学部・学科・諸課程別分析編	117
経年分析編	
I. 授業アンケート集計	131
II_1. 全体理解度評価	
1. 学科(回答者所属学科)別	132
2. 学年別	133
3. 学部(回答者所属学部)・学年別	134
II_2. 総合満足度評価	
1. 学科(回答者所属学科)別	136
2. 学年別	137
3. 学部(回答者所属学部)・学年別	138

前付：設問番号について

平成25年度実施分は、全学共通設問・学部独自設問ともに、平成24年度から設問内容の変更はない。また、学部独自設問の違いによって、アンケート用紙を4種類用意する点も変更はない。ただし、回答のしやすさを考慮して、設問の配列を変更する改定を行った。

具体的には、設問内容が全学共通なのか学部独自なのかにかかわらず、その内容が「授業について」か「学生自身について」かの2つに分類して配したことである。しかしこれにより、全学共通設問であっても、用紙の種類によって異なる設問番号が振られることとなった。

本報告書では、設問を示す際に冗長さや混乱を避けるため、アンケート用紙に表示されている設問番号ではなく、下表のとおり統一した番号を用いる。全学共通設問は、調査票の設問順にアルファベット「A」から付番した。ただし「この授業にどの程度出席しましたか」については、質問のタイプが他とは異なるため、全学共通設問の中での末尾「J」とした。以降「J」から、学部独自設問を用紙色グリーン、ブルー、オレンジの順に付番した。

設 問		用紙色と設問番号				報告書 設問番号	学部別質問項目 での補足	(参考) 前年度 番号
		白 <small>教養総合、 経済学部、 神道文化学部</small>	グリーン <small>文学部</small>	ブルー <small>法学部</small>	オレンジ <small>人間開発 学部</small>			
授業について	教員の話や指示は明確で聞き取りやすかったですか		Q 1			問A		Q4
	板書や教材は理解の助けになりましたか		Q 2			問B		Q5
	教員は意欲的に授業を進めていましたか		Q 3			問C		Q6
	他の履修学生は、この授業にまじめに取り組んでいましたか		Q 4			問J	グリーンのQ4	Q11
あなた自身について	この授業にどの程度出席しましたか	Q 4	Q 5	Q 4	Q 4	問I		Q 1
	授業の内容はシラバスに沿っていましたか			Q 5		問L	ブルーのQ5	Q11
	シラバスをよく読んでこの授業を履修しましたか	Q 5	Q 6	Q 6	Q 5	問D		Q 2
	予習・復習をするなど授業に意欲的に取り組みましたか	Q 6	Q 7	Q 7	Q 6	問E		Q3
	この授業を理解できましたか	Q 7	Q 8	Q 8	Q 7	問F		Q 7
	授業のテーマへの関心が高まりましたか	Q 8	Q 9	Q 9	Q 8	問G		Q 8
	この授業を履修して良かったですか	Q 9	Q 10	Q 10	Q 9	問H		Q 9
	あなたは、質問をするなどして担当教員と積極的にコミュニケーションをとりましたか		Q 11			問K	グリーンのQ11	Q 10
	この授業について、授業時間外に週平均でどのくらい勉強しましたか			Q 11		問M	ブルーのQ11	Q 10
	この授業を受けて、知識や能力が増大したと思えますか			Q 12		問N	ブルーのQ12	Q 11
	この授業に関する教科書以外の本を何冊読みましたか				Q 10	問O	オレンジのQ10	Q 10
	この授業は指導者の資質を備える上で役に立ったと思えますか				Q 11	問P	オレンジのQ11	Q 11
	この授業は将来の自分の生き方を考える上で役に立ったと思えますか				Q 12	問Q	オレンジのQ12	Q 12
***** (設問なし)	Q 10 ~ Q 12	Q 12						
教員指示	自由設問欄	Q 13、Q 14						

- ・「-」は、その用紙色では設問が設けられていないことを示す。
- ・平成24年度のアンケート用紙では、全学共通設問の後に学部独自設問を配している。

全体分析編

全体講評

平成24年度に引き続き、基本集計と、「全体理解度」「総合満足度」の2軸を中心とした集計・分析、項目間クロス集計とコレスポネンス分析を利用した、理解度・満足度に影響する要因の抽出を行った。これにより、改善へ向けての提言をまとめている。

■調査目的

本学学生の授業に関する意識・状況を把握し、今後の授業改善のための基礎資料とする。
また、この基礎資料を活用することにより、授業の学修効果の向上及び「教育の質保証」の維持を狙う。

■実施概要

●アンケート実施の前期／後期バランスについて

「Ⅰ. 回答者プロフィール」での開講時期の割合は、前期49.3%:後期39.9%。やや前期に集中している状態は、前年度(49.9%:34.9%)と変わっていない。

科目数については、前期／後期ほぼ同数であり(下記表参照)、実施率・回答率ともに、前期の割合がやや高い。

	前期	後期
科目数	2,144	2,175
実施科目数	1,713	1,638
実施率	79.9%	75.3%

履修者数	118,085	104,745
回答数	65,521	54,419
回答率	55.5%	52.0%

■授業評価結果に影響を与える要素と、授業改善につながる提言

●学生の授業への意欲度について

「Ⅱ. 授業アンケート集計」において、問E「授業への意欲度」(予習・復習をするなど授業に意欲的に取り組みましたか)は、他の項目と比べて著しく低い。

この項目が理解度・満足度の結果と直結していることは、「XI.1.理解度からみた各項目の評価」、「XI.2.満足度からみた各項目の評価」における項目間クロス集計からも明らかである。授業の事前準備や事後の展開など、学生の主体的な学びを促し意欲を高めるために、効果的な具体策を検討し注力する必要がある。

●各評価指標にクラス規模が及ぼす影響について

「全体理解度」と「総合満足度」は、クラス規模「50名未満」が最も高く、クラス規模が大きくなると低下する。ただし、100名を境に横ばいとなり、300名を超えるとやや上昇する。

この傾向は、全学共通設問をクラス規模別に集計した「XII.クラス規模別評価」においても、また、問D「シラバスをよく読んでこの授業を履修しましたか」を除く全ての設問でも同様であった。

クラス規模を可能な限り50名未満に抑える一方で、「300名を超えると上昇する」要因について分析することや、大規模クラスにおける科目属性(講義か演習か、教養か専門か、など)の違いを踏まえた改善点を模索することは、学修効果の向上に有効な施策を講じることに繋がる。

●相関関係について

全設問間の相関をまとめた「IX.相関係数(学部別)」では、全ての学部で、問A「教員の話や指示は明確で聞き取りやすかったですか」、問B「板書や教材は理解の助けになりましたか」、問C「教員は意欲的に授業を進めていましたか」、問F「この授業を理解できましたか」、問G「授業のテーマへの関心が高まりましたか」、問H「この授業を履修して良かったですか」の項目間に、それぞれやや高い相関がみられた。このことから、教員の働きかけ(問A・問B・問C)と授業効果(問F・問G・問H)の関係性の強さが見て取れる。授業改善を考える際には、この点に留意すべきである。

また、特に高い相関がみられたのは、授業効果を示す問F・問G・問Hの項目間である。これにより、「理解→関心度向上→満足」という密接な関係が証明された。これは、「IX.相関係数(学部別)」のほか、「学部・学科・諸課程別分析編」においても、はっきりと読み取ることができる。

●理解度・満足度からみた各項目の評価（項目間クロス集計）について

「XI_1.理解度からみた各項目の評価」と「XI_2.満足度からみた各項目の評価」では、項目間クロス集計に加え、項目間の影響度をより定量的・視覚的に把握するために、コレスポンデンス分析を用いて各項目と理解度・満足度の関係性を分析した。授業評価の結果(効果)に対して、「理解できた／できなかった」「満足できた／できなかった」などの、下記のような関係性が明らかになった。

理解度・満足度が高い層は、教員の働きかけ(指示、板書、意欲)に対して、強い関係性がある。

理解度・満足度が低い層は、教員の働きかけとの関係性は弱い。

理解度と満足度、また、それらと授業への意欲や授業テーマへの関心の高まりは、強い関係性がある。

詳細は XI_1「理解度からみた各項目の評価」、XI_2「満足度からみた各項目の評価」を参照のこと。

●改善へ向けたアプローチについて

授業評価アンケートを数年にわたり実施して得られた知見を元に、さらなる展開に向けた組織的なアプローチが必要である。(注1)

・学生の取り組み(予習・復習)の改善

①取り組み状況と理解度・満足度の関係性を学生に積極的に公表する

②学生の主体的な学びを促し、意欲を高めるための施策を検討する

文学部独自設問によれば、教員と学生間のコミュニケーションと学修意欲は、他の設問と比較して相対的に相関が高いことがわかった。K-TeaDにより教員からアンケート結果をフィードバックすることや、オフィスアワーなどを利用した双方向コミュニケーションに、更に取り組むべきである。

・大学の取り組み(課題や工夫の共有、改革サイクルの確立)の改善

①授業改善アンケートに対し、学生や教員から意見を集約し、アンケートの目的を再設定する

②経年分析の視点を残しつつ、改善効果が高い施策を探るために調査票を改定する

③教職員参加型のワークショップ形式FDを更に推進する

④蓄積されている、授業評価アンケートの教員コメントや、ティーチング・ポートフォリオ(注2)を、クラス規模や授業形態(講義・演習・実習等)、対象(学部・教養・専門等)別に検索可能とし、改善ヒント集とする

・教員の取り組み(話し方、板書、意欲)の改善

「意欲的に授業を進める」を中心に、総じて教員の取り組みに対する評価は高い。相対的に評価がやや低い、「講義の聞き取りやすさ」「板書や教材の工夫」については、改善の余地がある。

(注1)「大学における教育内容等の改革状況等について(平成23年度)」平成25年11月7日 文部科学省高等教育局 大学振興課大学改革推進室

・調査対象は、国公立大学759大学。回答率99.8%。

・学生による授業評価を実施した708大学のうち、「授業アンケートの結果を授業内容等に反映するための機会を設けている」のは368大学、「大学の授業に関し、学生自治会から意見を聞く機会を設けている」のは89大学。

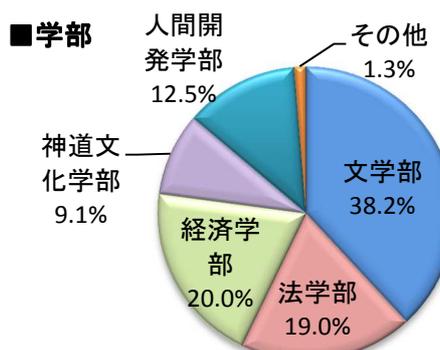
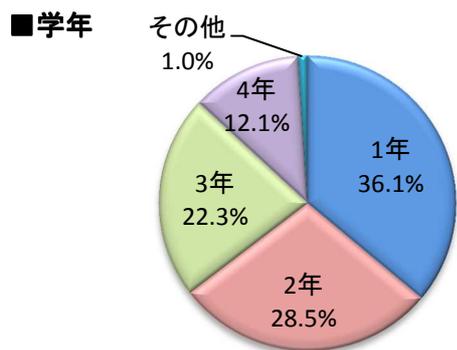
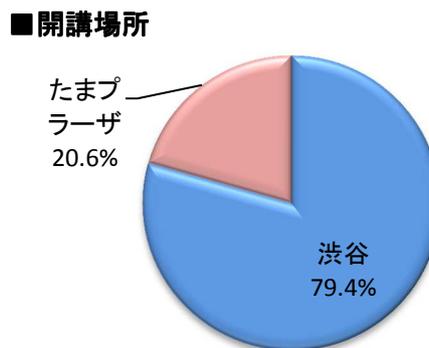
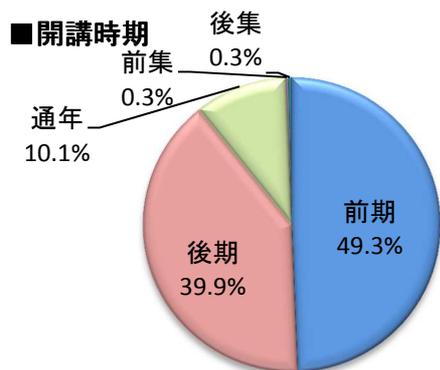
・「今後の課題と求められる取組」の一つとして挙げているのが、「学生の学修時間等や学修成果の把握に基づく、大学教育の質的転換に向けた改革サイクルの確立」である。大学教育の質的転換に向けた改革サイクルを確立するために重要なこととして、学生の学修時間・学修成果の把握を行うことや、その分析結果を教育課程の見直し・改善に結び付けていくことを挙げている。また、学生の能動的学修を推進する観点から、ワークショップ形式等のFDを、積極的に実施するよう求めている。

(注2)大学等の教員が自分の授業や指導において投じた教育努力の少なくとも一部を、目に見える形で自分及び第三者に伝えるために効率的・効果的に記録に残そうとする「教育業績ファイル」。

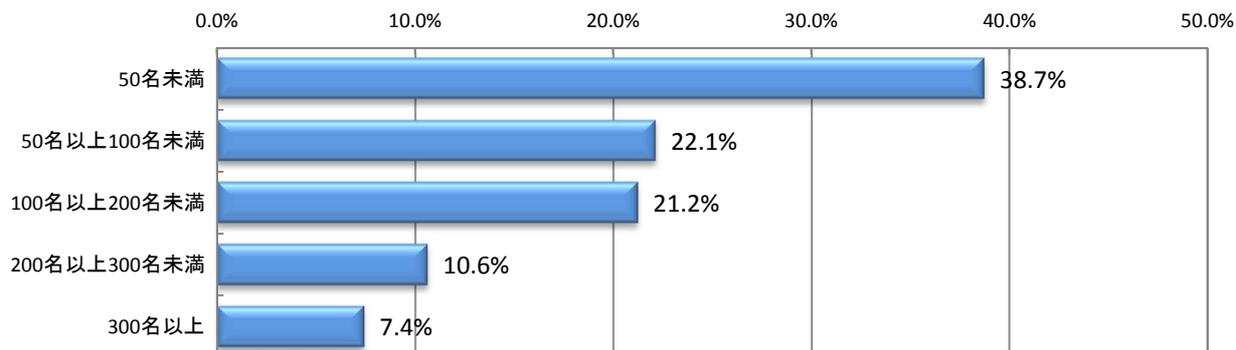
(「学士課程教育の構築に向けて(答申)」平成20年12月24日中央教育審議会 用語解説より。)

業績のみでなく、教育活動の方法や成果なども含まれ、答申本文にも、その導入・活用の積極的検討をうたっている。

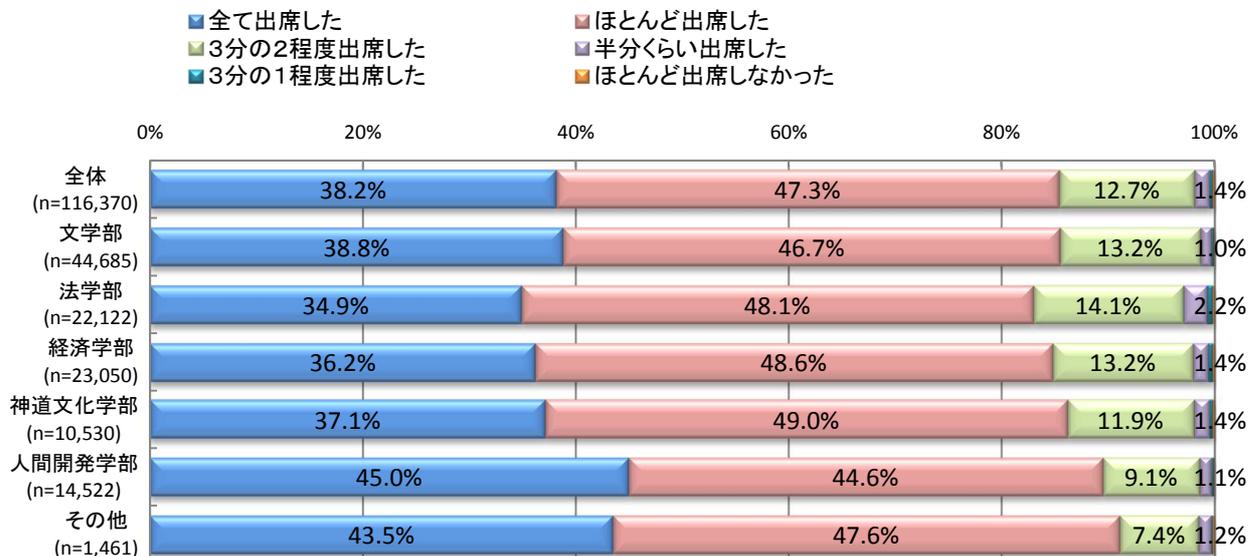
I. 回答者プロフィール



■クラス規模



■出席状況



■開講時期

「後期」は前年度より5ポイント増、「通年」は4.4ポイント減。

■開講場所

前年度に続き、「たまプラーザ」は微増。

■学年

「3年生」が2ポイント減。全体的なバランスは、前年度と同様。

■学部

「人間開発学部」が2ポイント増。

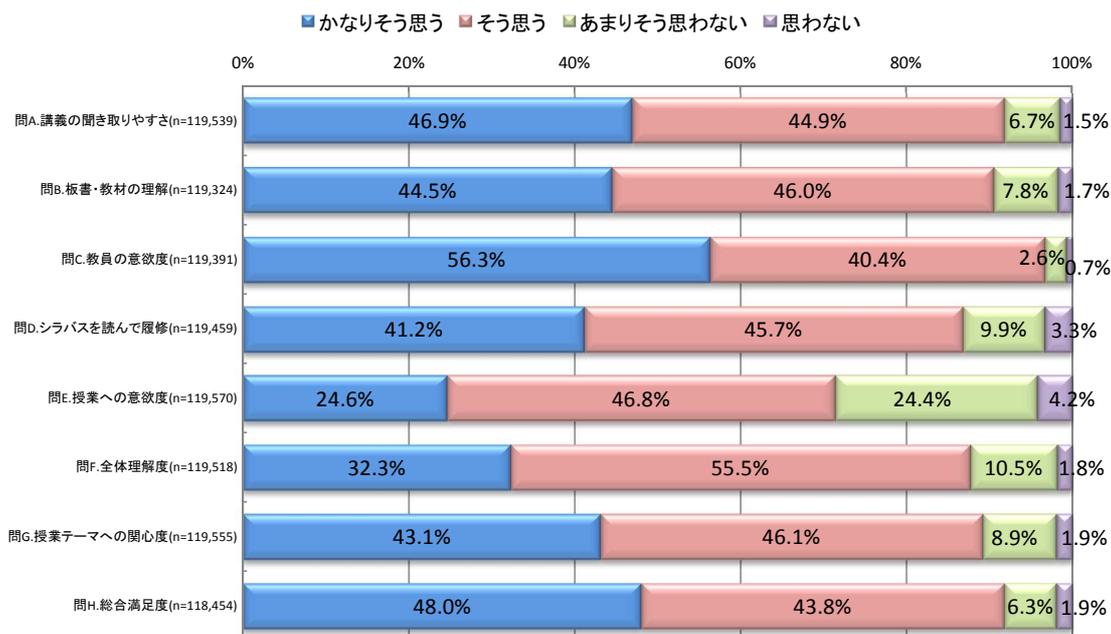
■クラス規模

200名未満までのクラス規模は、微減。200名以上は、微増。

■出席状況

「全て出席した」は、全体で2.2ポイント増加。

Ⅱ. 授業アンケート集計



全学共通設問について、集計した。

調査票前半にある教員の働きかけに関する設問(問A～問C)は、後半にある学生自身に関する設問(問D～問H)と比較して、高いスコアであった。「そう思う(計)」(「かなりそう思う」+「そう思う」、以下同じ)の上位項目は、「教員の意欲度」(96.7%、前年比+0.3)、「講義の聞き取りやすさ」(91.8%、+2.1)、「総合満足度」(91.8%、+0.5)、「板書教材の理解」(90.5%、+0.6)。

全体として、教員の授業努力や、熱意・意欲は学生に高く評価されていると考えられる。これらの項目では、「そう思う」「あまりそう思わない」層を、「かなりそう思う」へ引き上げることが課題の一つとなる。

一方、学生自身に関する設問の中でも、「問E. 授業への意欲度」(予習・復習をするなど授業に意欲的に取り組みましたか)のスコアは著しく低い。これは、前年度も同様の結果であった。

学生の興味を引き出し意欲をかきたてるために、授業時間だけにとどまらず、事前の準備や事後の展開が適切・有効に行われる工夫が必要である。

※各学部独自に設定した設問の集計結果については、「Ⅲ. 学部(回答者所属)別構成比」を参照のこと

Ⅲ. 学部（回答者所属）別構成比

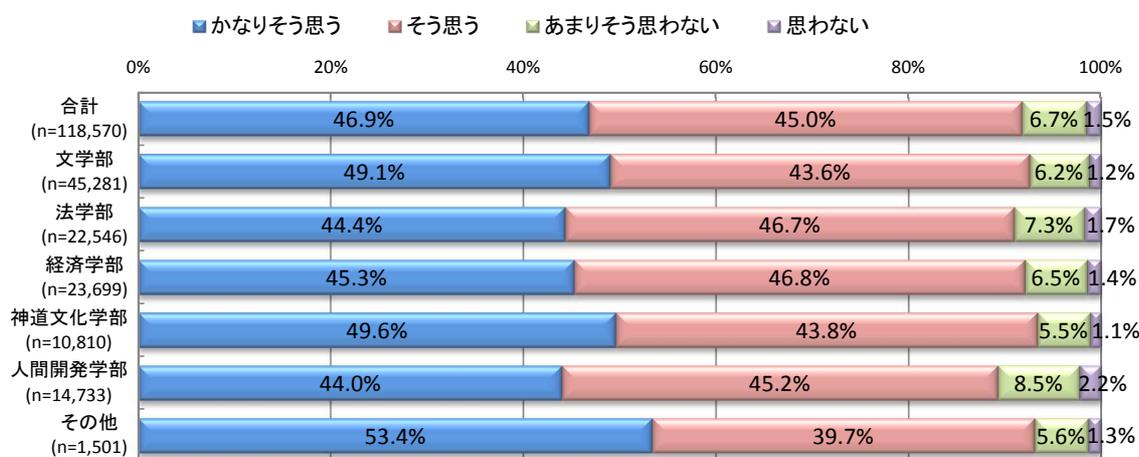
1. 共通設問への回答集計

共通する各設問(問A～問H)について、学部別に集計した。

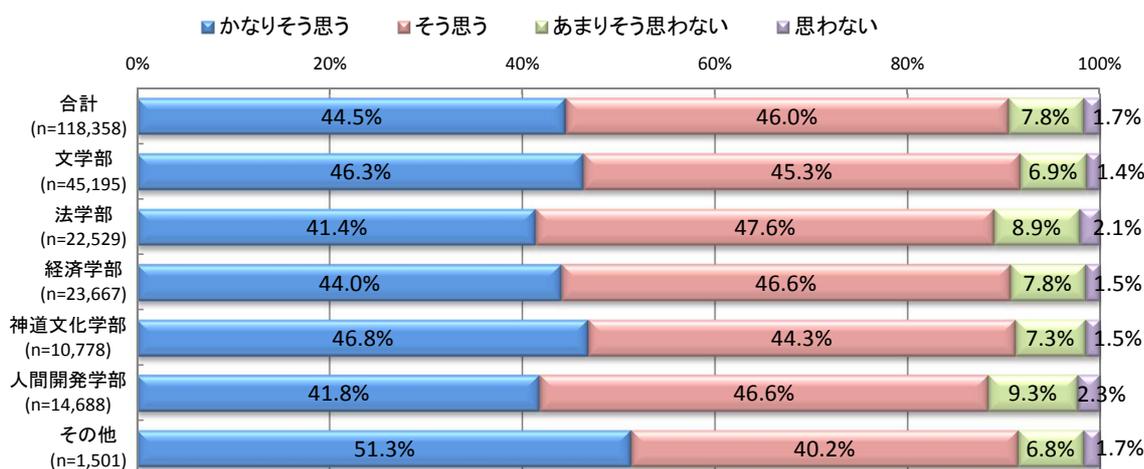
「そう思う(計)」は、問D「シラバスをよく読んでこの授業を履修しましたか」を除き、学部による有意差はみられなかった。問Dでは、人間開発学部だけが、他の学部と比べ低い結果となった。

これは、コースを決めると必然的に履修すべき科目が決まるという人間開発学部の特性によるものである。ただし、平成23年度、平成24年度に続いて同様の結果であり、改善の余地がないか検討する必要がある。

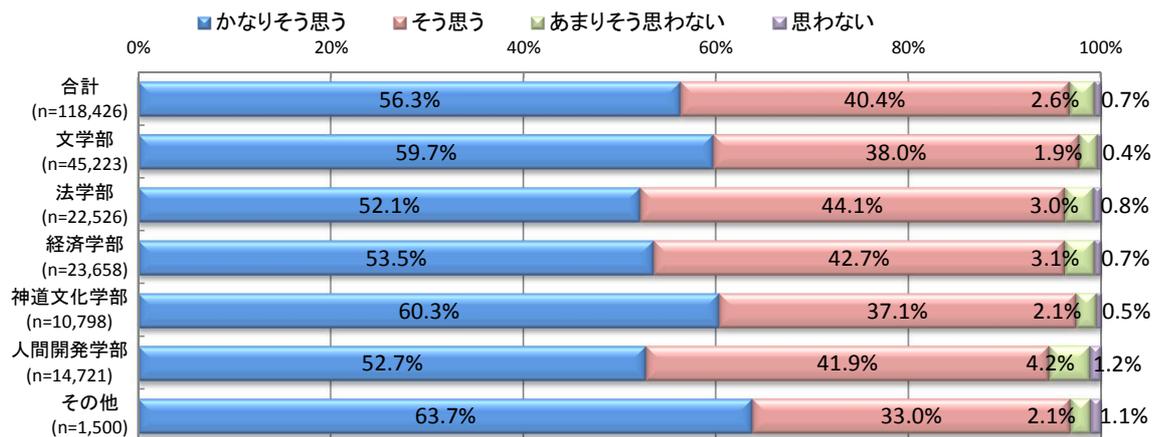
問A.教員の話や指示は明確で聞き取りやすかったですか



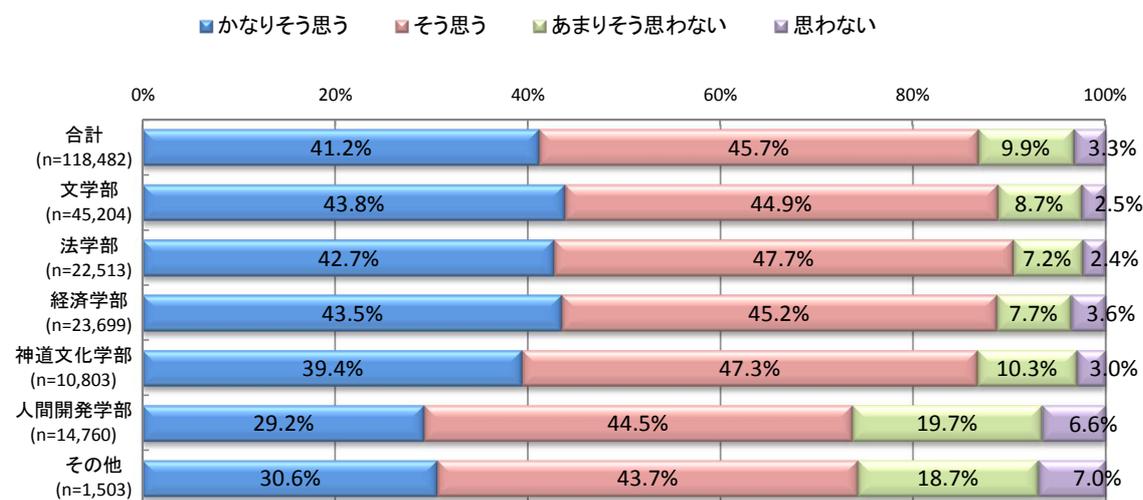
問B.板書や教材は理解の助けになりましたか



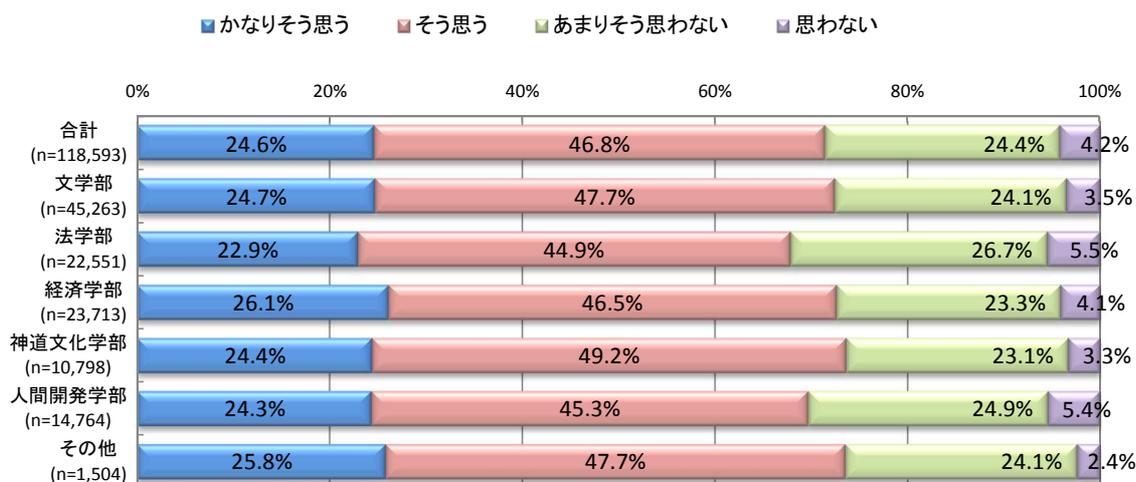
問C.教員は意欲的に授業を進めていましたか



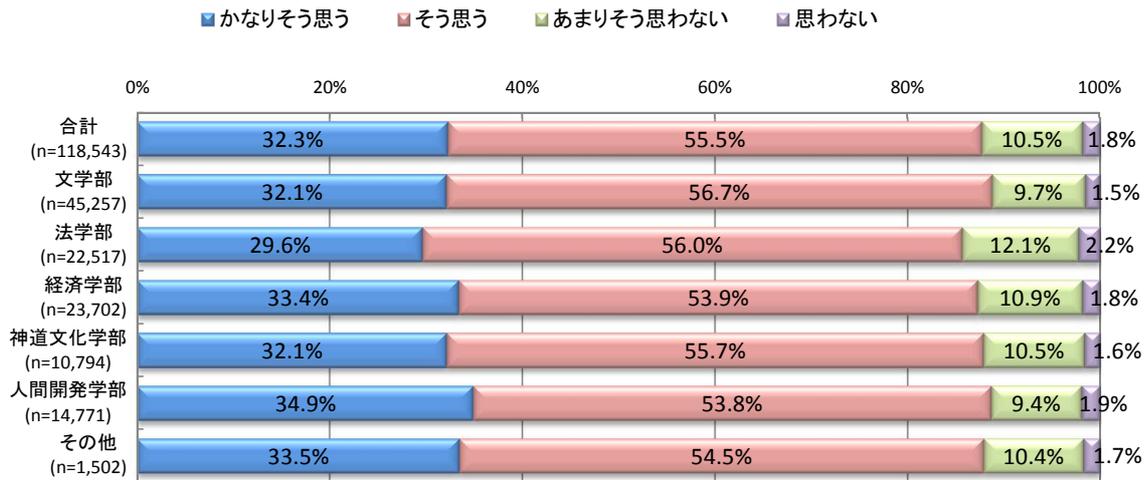
問D.シラバスをよく読んでこの授業を履修しましたか



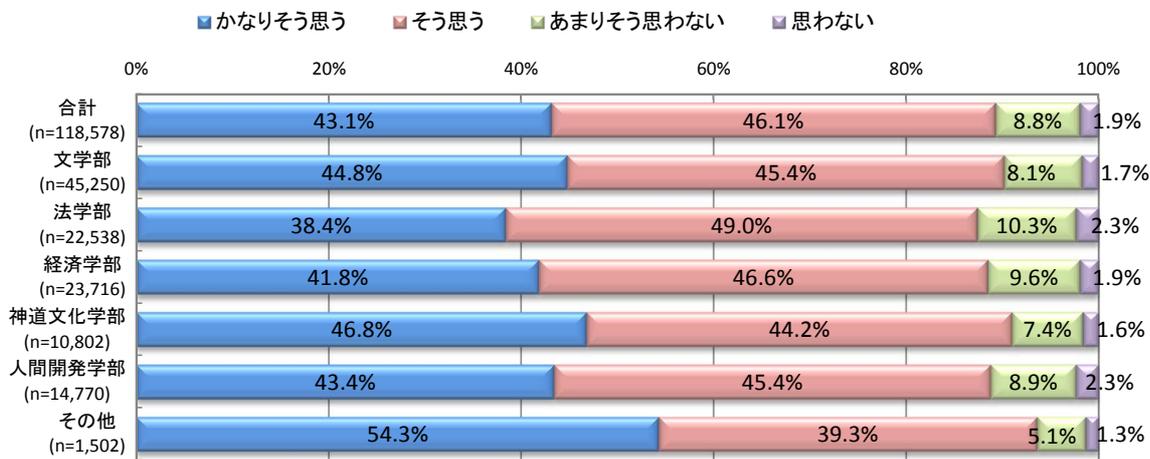
問E.予習・復習するなど授業に意欲的に取り組みましたか



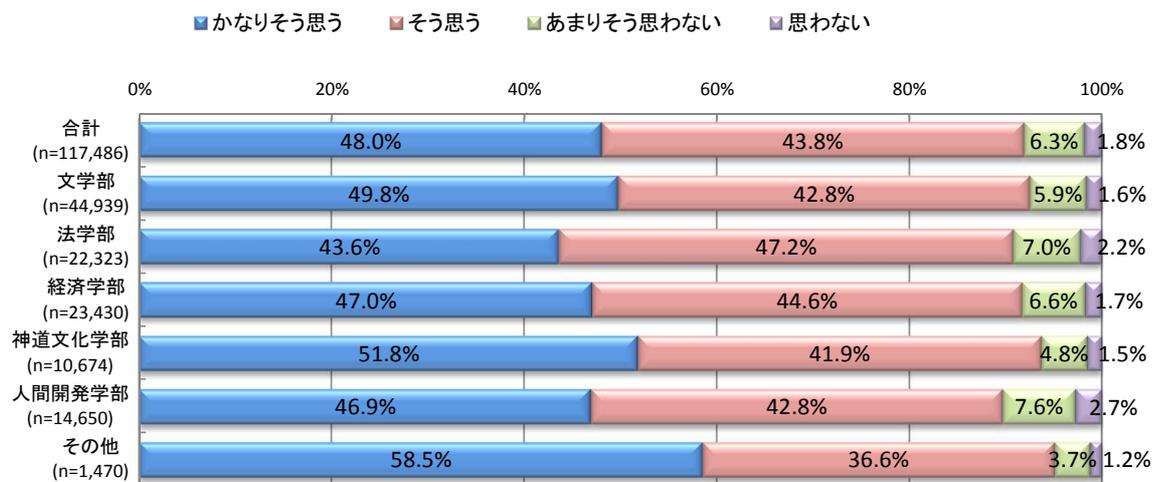
問F.この授業を理解できましたか



問G.授業のテーマへの関心が高まりましたか



問H.この授業を履修して良かったですか



2. 学部別設問への回答集計

学部別の設問について、全体(全回答者)・該当学部・その他(該当学部以外)別に集計した。

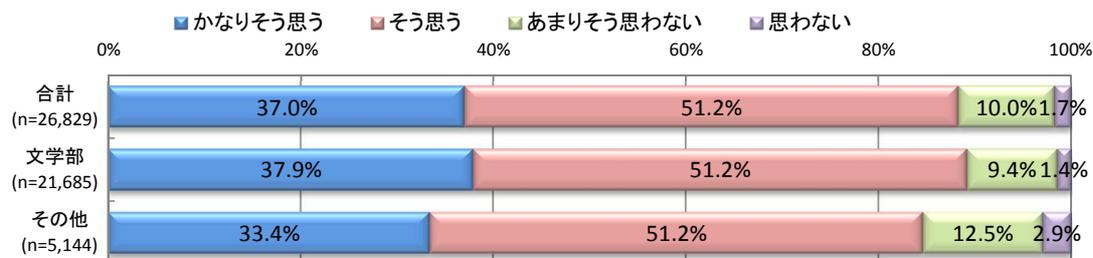
文学部:用紙色グリーン

法学部:用紙色ブルー

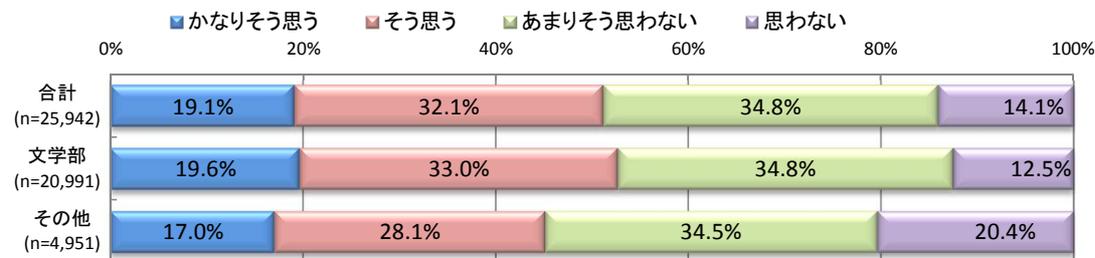
人間開発学部:用紙色オレンジ

①文学部設問(用紙色グリーン)

問J.他の履修学生は、この授業にまじめに取り組んでいましたか(グリーンQ4.)



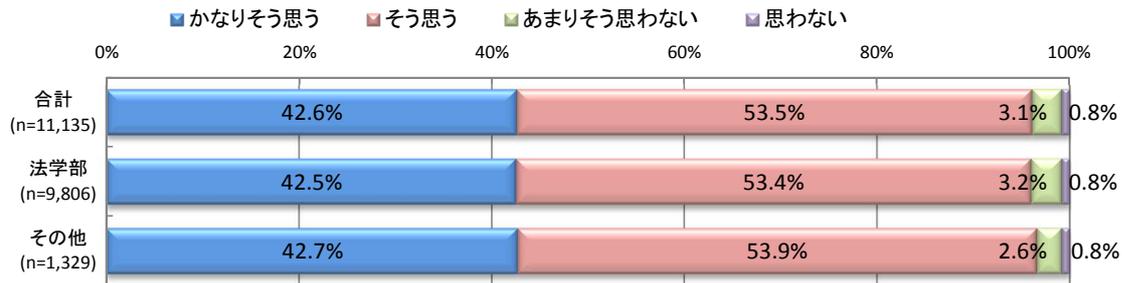
問K.担当教員と積極的にコミュニケーションをとりましたか(グリーンQ11.)



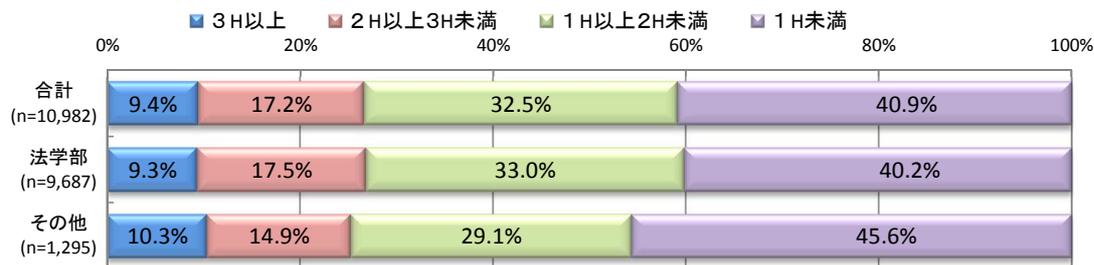
文学部設問の問K「担当教員と積極的にコミュニケーションをとりましたか」において、文学部の学生で「そう思う(計)」は、約半数の52.6%であった。

②法学部設問（用紙色ブルー）

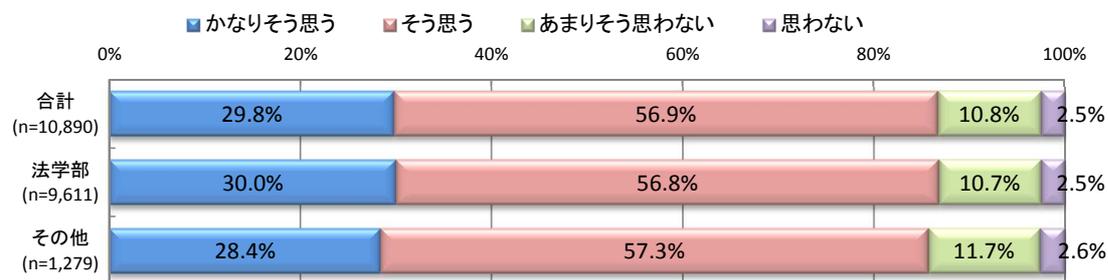
問L.授業の内容はシラバスに沿っていましたか（ブルーQ5）



問M.この授業について、授業時間外に週平均でどのくらい勉強しましたか（ブルーQ11）



問N.この授業を受けて、知識や能力が増大したと思いますか（ブルーQ12）

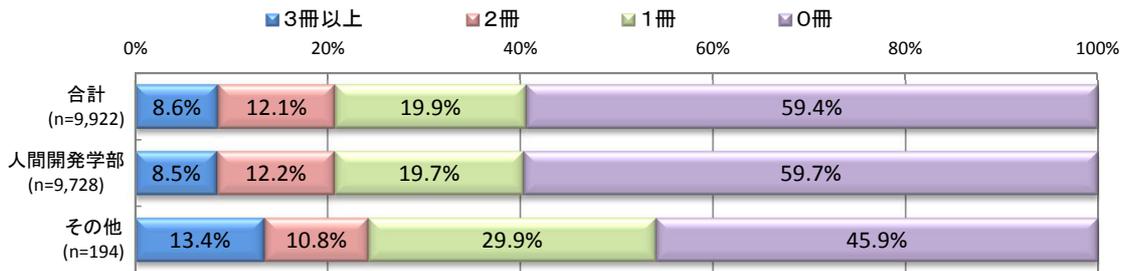


法学部設問の間Mにおいて、授業時間外の週平均学修時間が「1時間未満」の学生は、学部を問わず40%以上存在する。

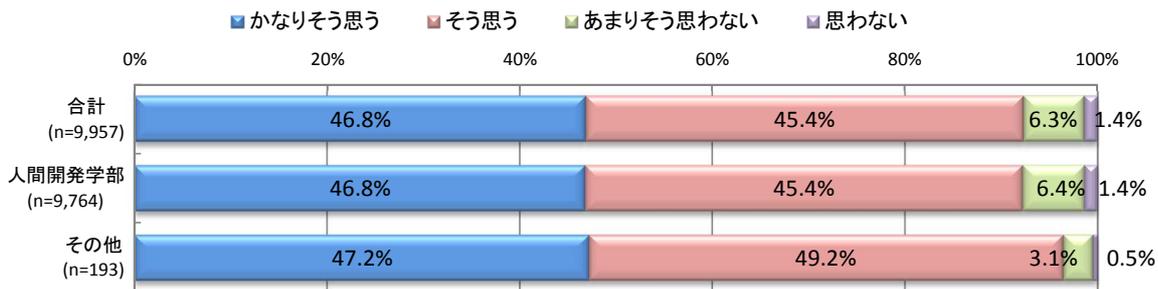
問Nにおいて、法学部の学生が、授業によって知識や能力が増大したと感じる割合は、「そう思う(計)」で86.8%と高い。

③人間開発学部設問（用紙色オレンジ）

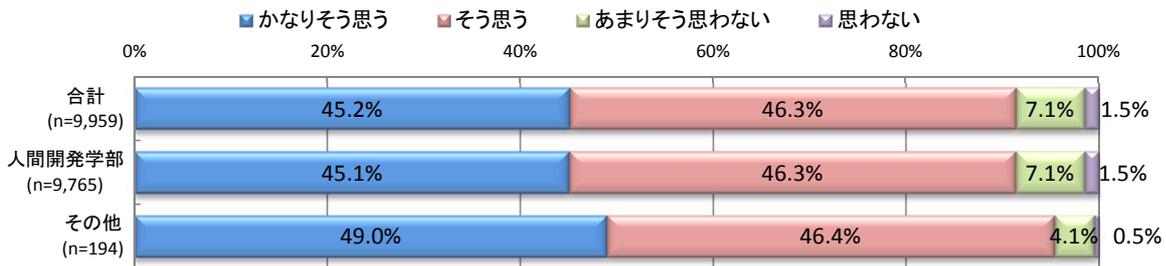
問O.この授業に関する教科書以外の本を何冊読みましたか（オレンジQ10）



問P.この授業は指導者の資質を備える上で役に立ったと思いますか（オレンジQ11）



問Q.この授業は将来の自分の生き方を考える上で役に立ったと思いますか（オレンジQ12）



人間開発学部設問の問Oにおいて、授業に関する教科書以外の読書を全くしていない学生は、約60%存在する。

問P、問Qにおいて、人間開発学部の学生が、「授業が有益である」「将来の生き方を考える上で役に立った」と感じる割合は、いずれも「そう思う(計)」で90%を超えており、高い割合を示している。

IV_1. 全体理解度評価（問F. この授業を理解できましたか）

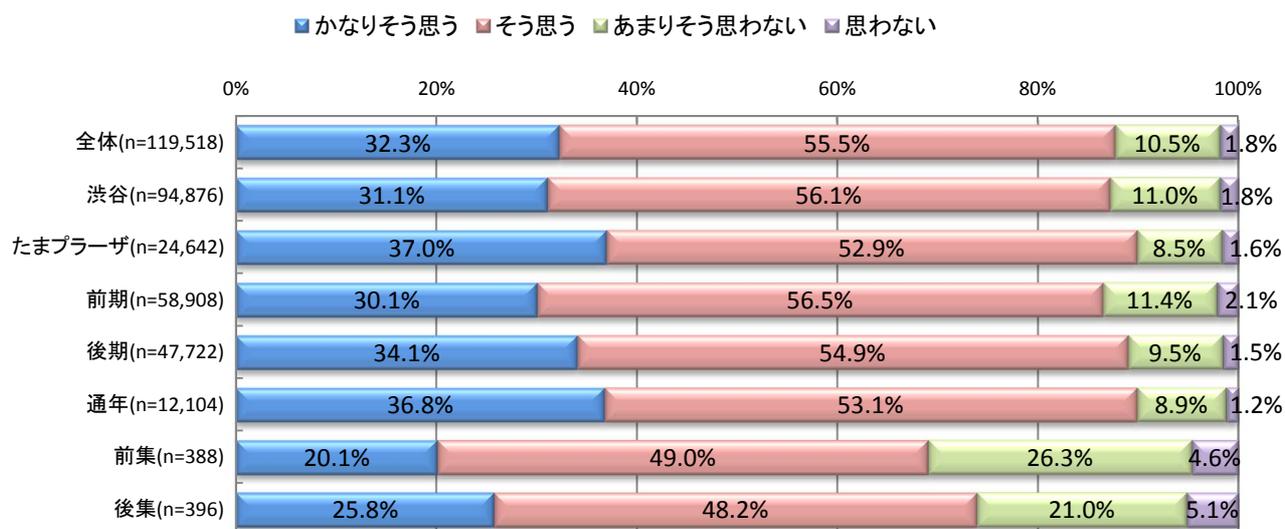
全体理解度を基軸として、回答者プロフィール（開講場所、開講時期、学部、学科、学年、クラス規模）と、授業科目の区分とのクロス集計を行った。

全体理解度（問F）について、「そう思う（計）」は全体で、87.8%（前年比+1.1）であった。

1. 開講場所・開講時期別

開講キャンパスによる、有意な差はみられなかった。

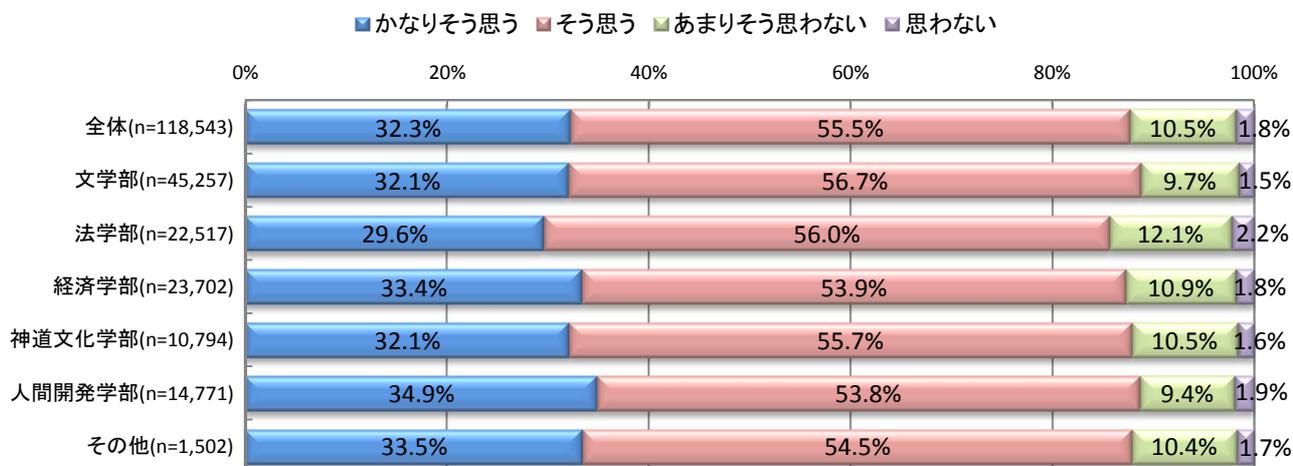
開講時期別では、半期科目及び通年科目はいずれも「そう思う（計）」が約90%であり、こちらも大きな差異はみられなかった。一方、半期集中科目は、前期・後期ともに70%前後とスコアが低かった。半期集中科目は、集中的な学修を意図して週2コマ半期集中で開講されているため、入試方式の多様化による理解力の差や教授法の差、他の履修科目との兼ね合い（授業外学修時間を十分に確保ができたか）など、さまざまな影響を受けやすいといえる。



2. 学部（回答者所属学部）別

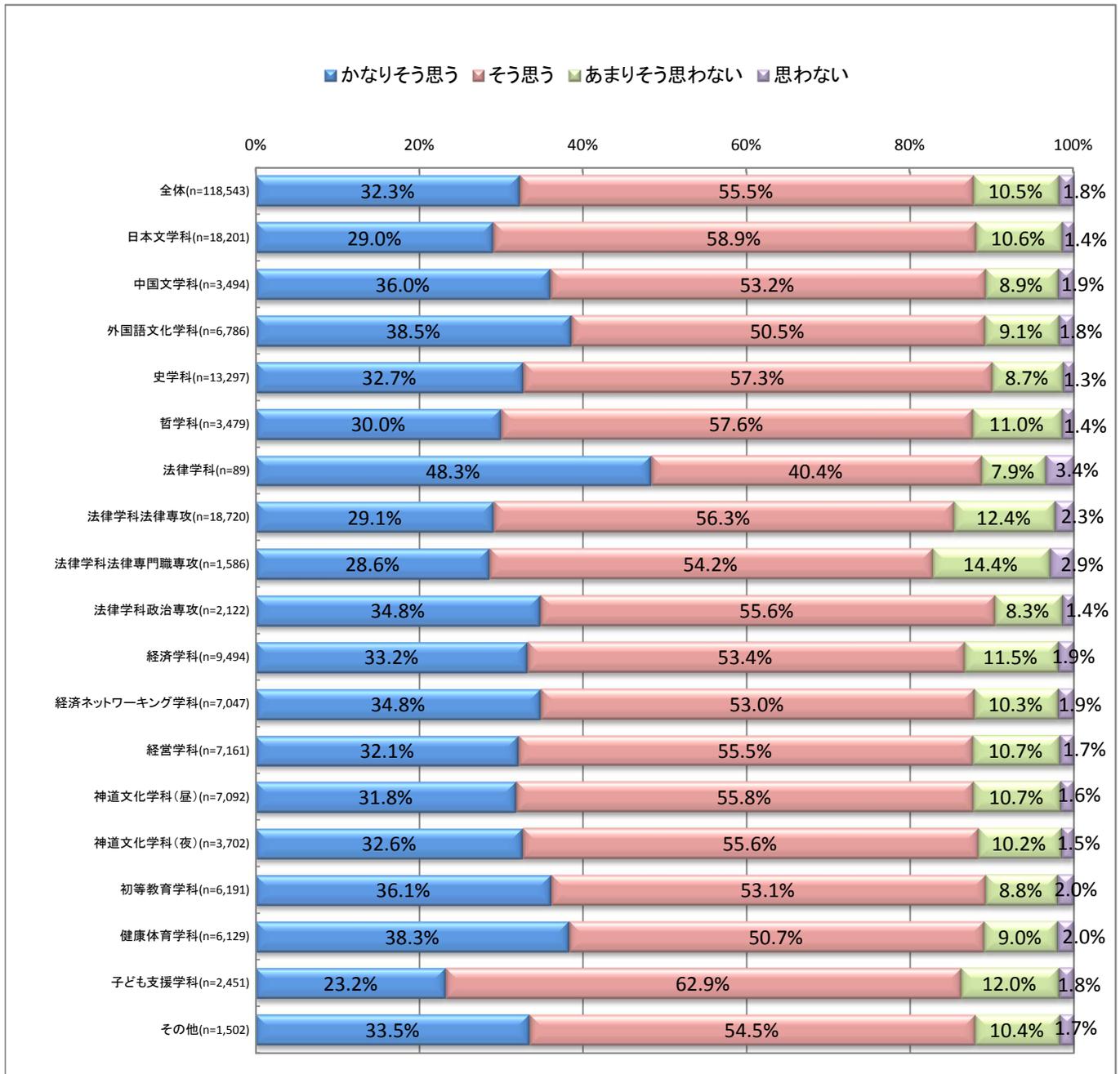
全体理解度（問F）について、学部による大きな差異はみられなかった。

全ての学部で、「そう思う（計）」が85%以上であった。



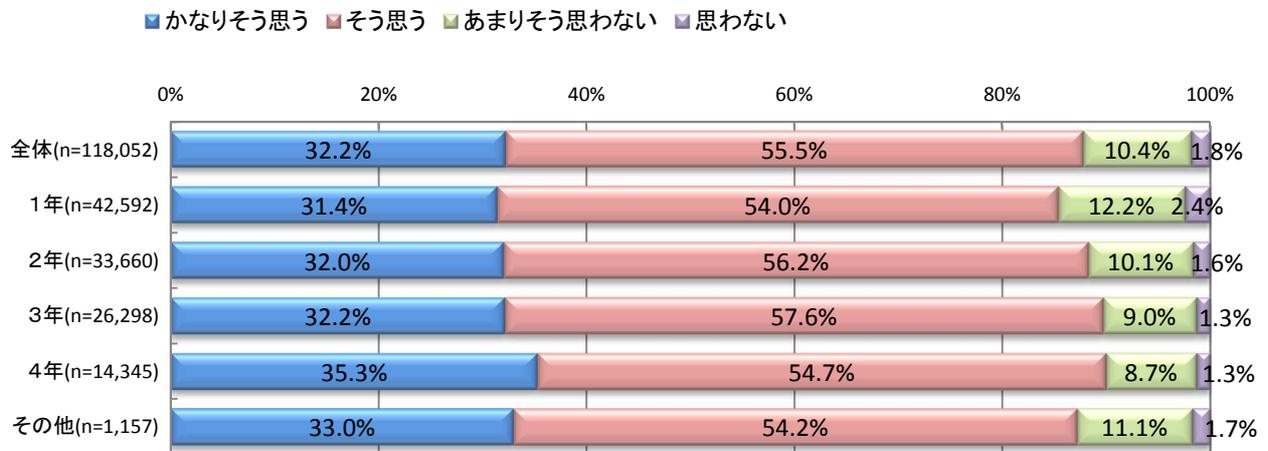
3. 学科（回答者所属学科）別

全体理解度(問F)について、学科別に集計した。「そう思う(計)」の結果には大きな差はなかったが、「かなり
 そう思う」割合は、学科によりややばらつきがみられる。



4. 学年別

全体理解度(問F)について、学年別に集計した。「そう思う(計)」は「4年生」が90%と最も高く、「1年生」が85.4%と最も低かった。学年による大きな差異はみられないが、学年があがるにつれ、理解度はやや上昇する傾向にある。

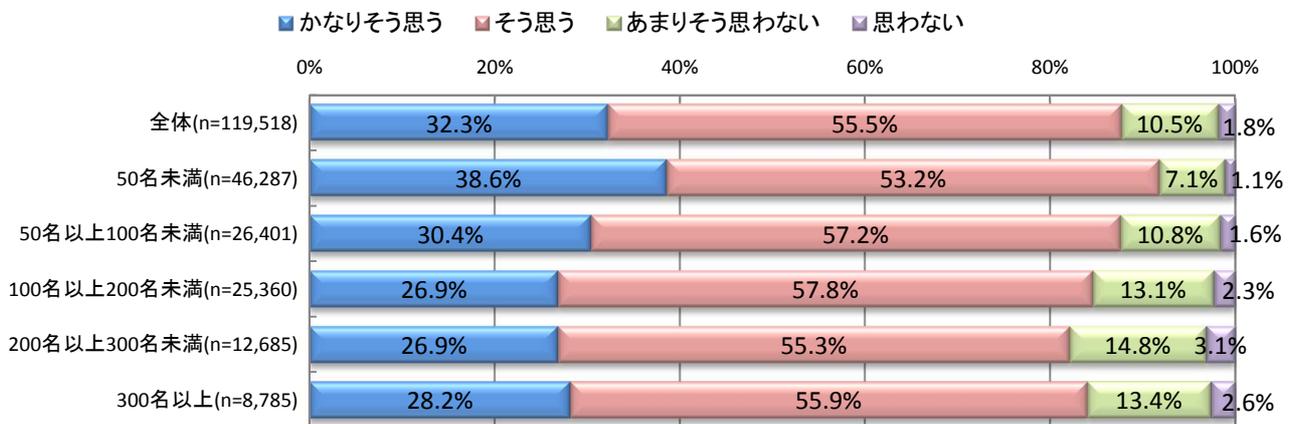


5. クラス規模別

全体理解度(問F)について、クラス規模別に集計した。

「そう思う(計)」が91.8%と、最も高い割合を示しているのは、「50名未満」のクラス規模であった。これは、平成23年度から続く傾向である。

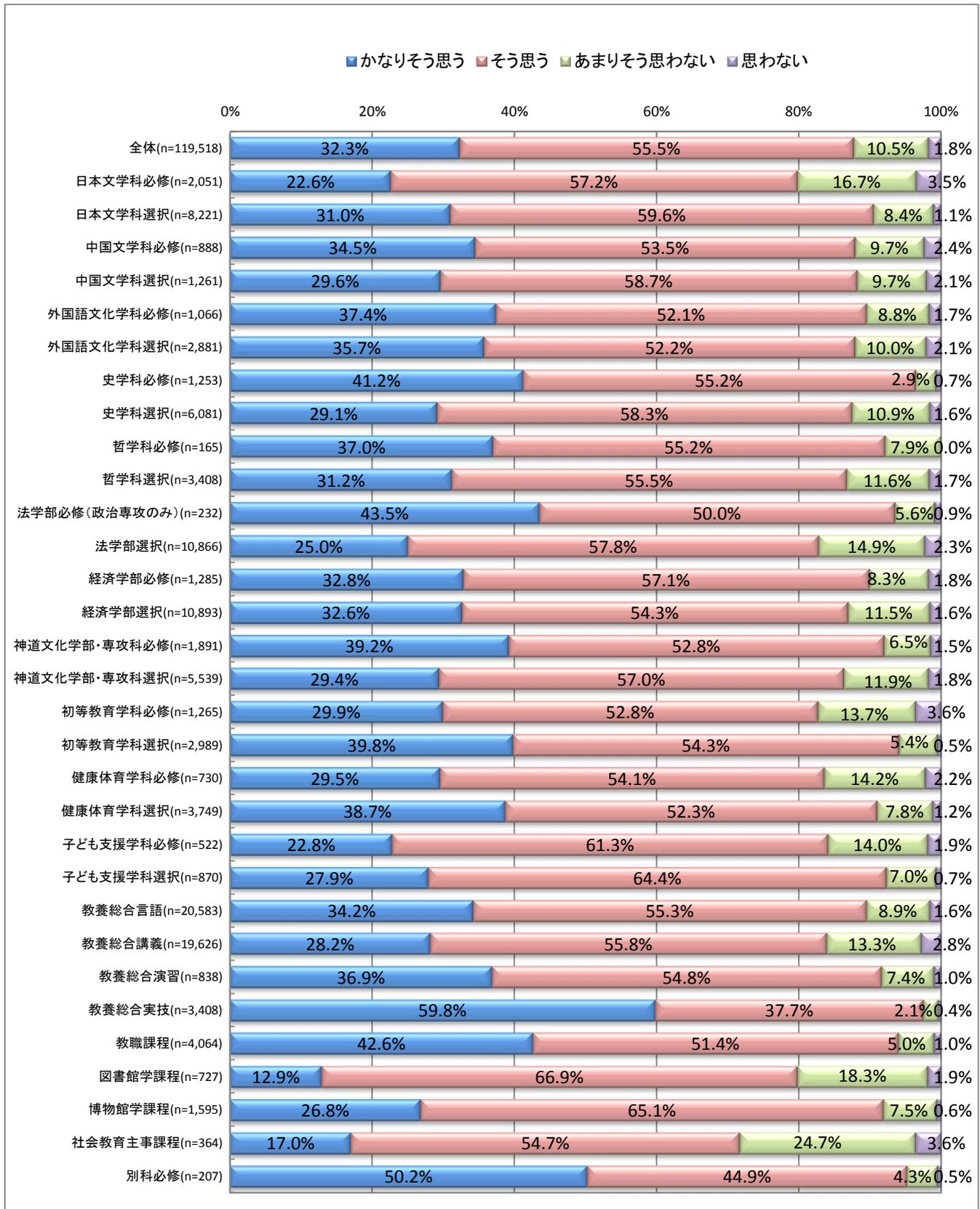
クラス規模が大きくなるにつれ、理解度は下がる傾向にあるが、「50名以上100名未満」では、全体とほぼ同じ割合となり、クラス規模が100名を超えると横ばいとなっている。また、300名を境にやや上昇している。



6. 科目（授業科目の区分）別

全体理解度(問F)について、授業科目の区分別に集計した。「そう思う(計)」が、最も高い科目「教養総合実技」(97.5%)と、最も低い科目「社会教育主事課程」(71.7%)の差は、25.8ポイント。「かなりそう思う」が50%を超えて特に高い理解度を示しているのは、「教養総合実技」と「別科必修」の2科目。

科目によって理解度のばらつきが生じており、全般的に前年度と同じ傾向がみられる。



IV_2. 総合満足度評価（問H. この授業を履修して良かったですか）

総合満足度を基軸として、回答者プロフィール（開講場所、開講時期、学部、学科、学年、クラス規模）と、授業科目の区分とのクロス集計を行った。

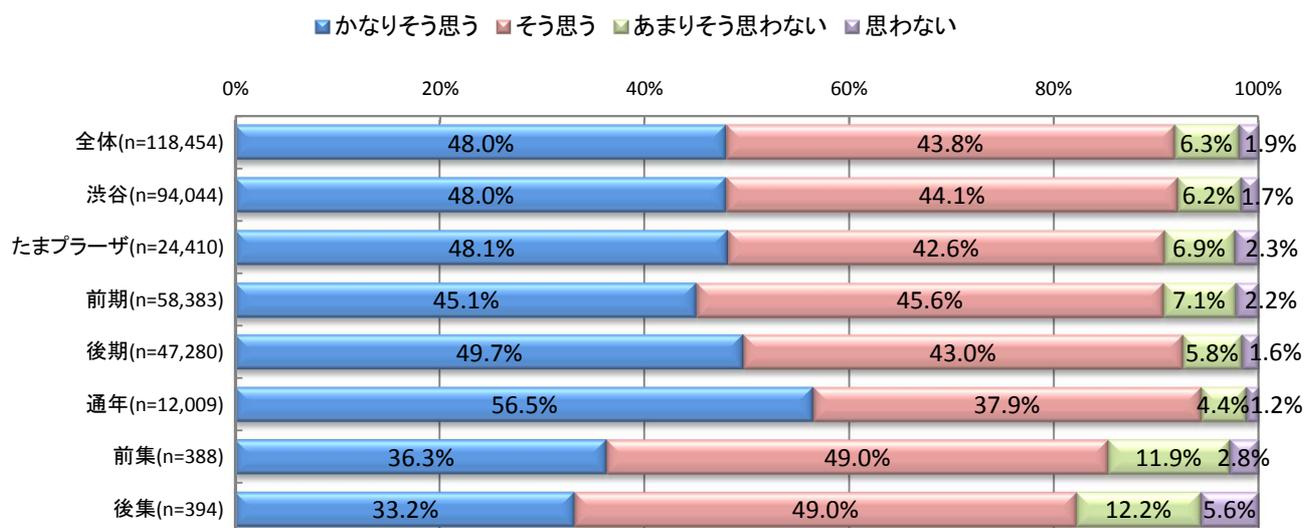
総合満足度（問H）について、「そう思う（計）」は全体で91.8%（前年比+0.6）であった。

1. 開講場所・開講時期別

開講キャンパスによる、大きな差異はみられなかった。

開講時期については、半期科目及び通年科目はいずれも「そう思う（計）」が90%強あり、全体と比較しても大きな差異はみられなかった。一方、半期集中科目は前期・後期ともにスコアが低かった。

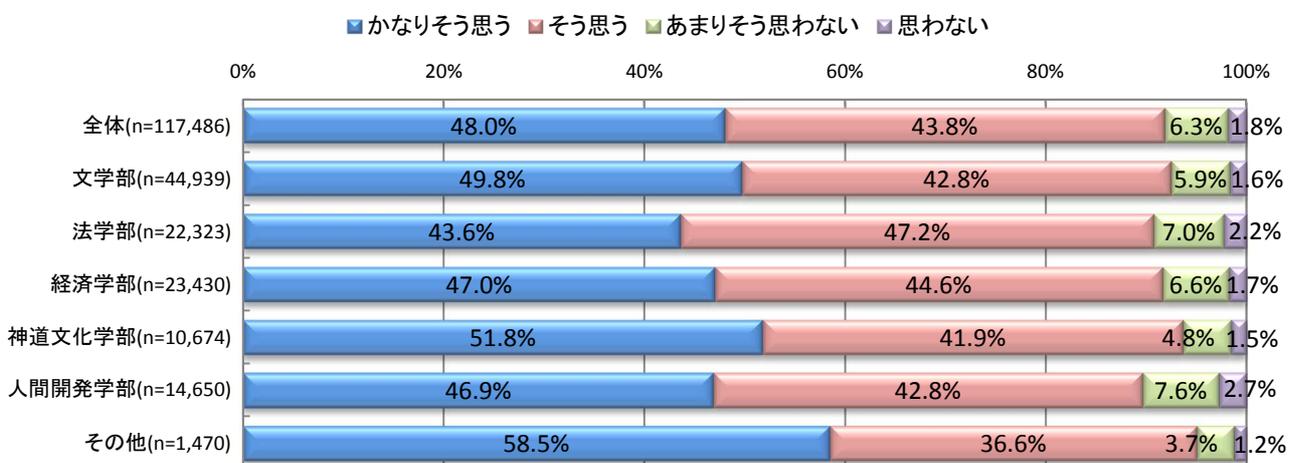
このような傾向は、全体理解度でもみられる。



2. 学部（回答者所属学部）別

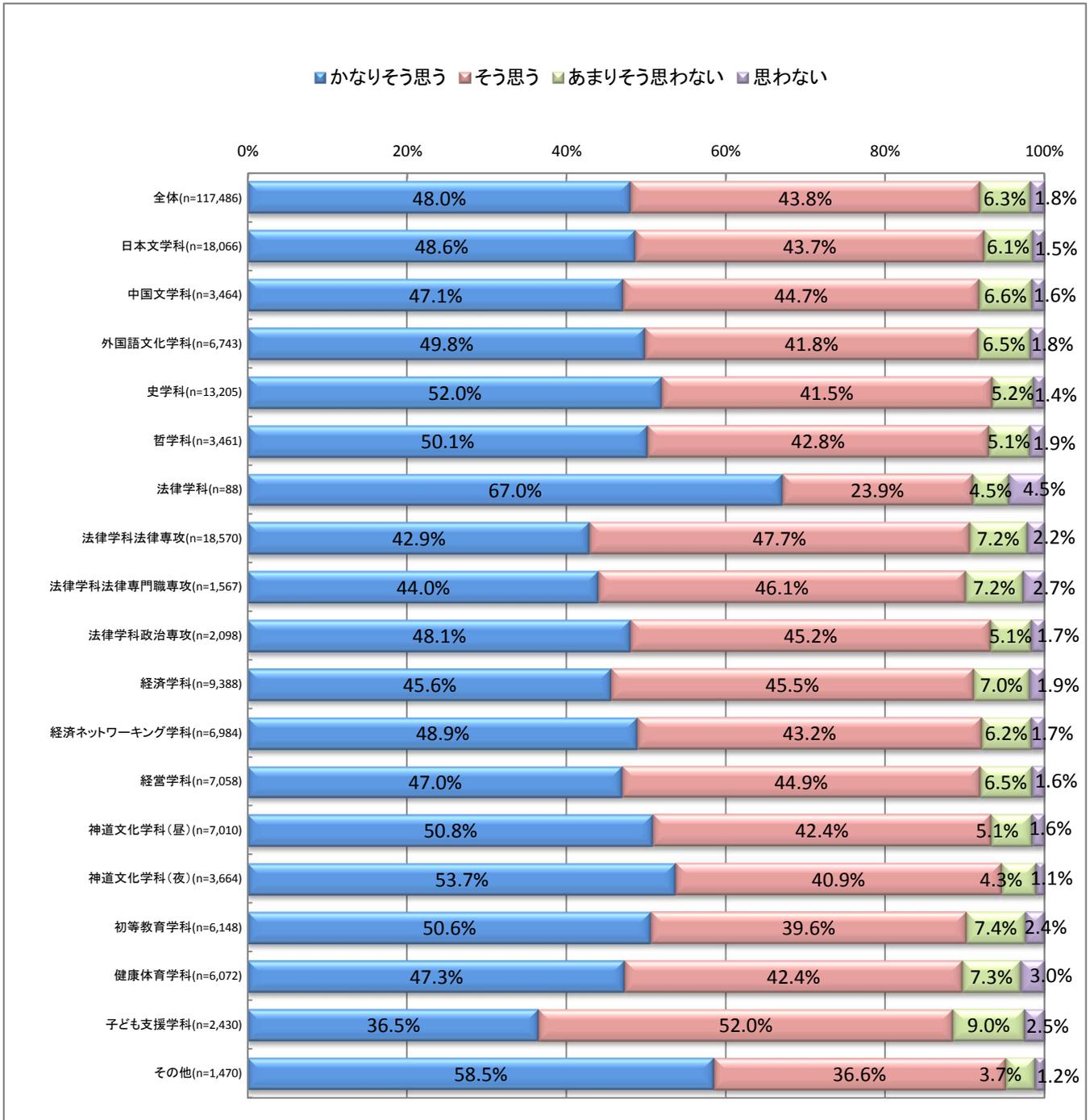
総合満足度（問H）について、学部による大きな差異はみられなかった。

いずれの学部も「そう思う（計）」は、約90%であった。



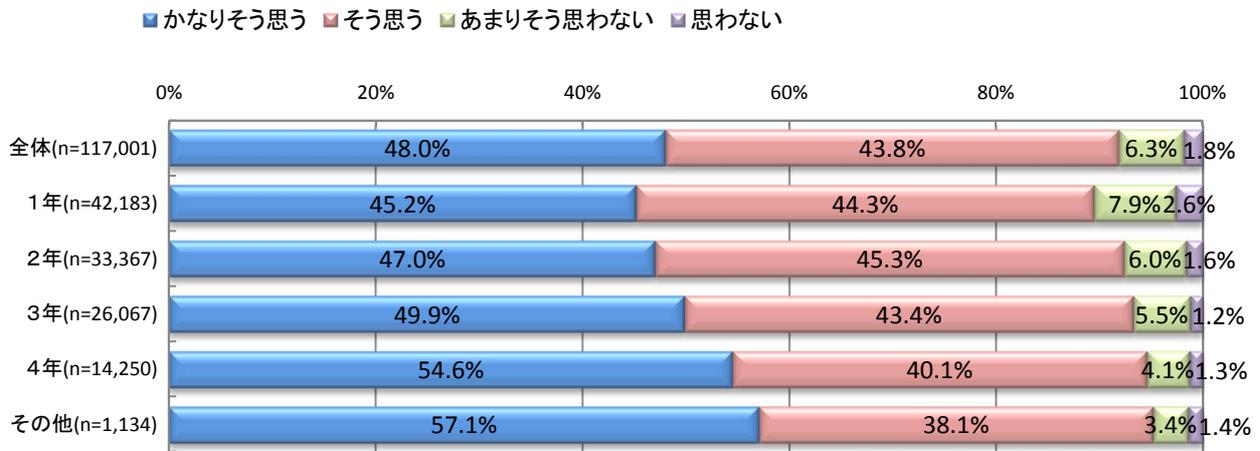
3. 学科（回答者所属学科）別

総合満足度(問H)について、学科別に集計した。「そう思う(計)」の結果には大きな差はなかったが、「かなりそう思う」割合は、学科によりややばらつきがみられる。



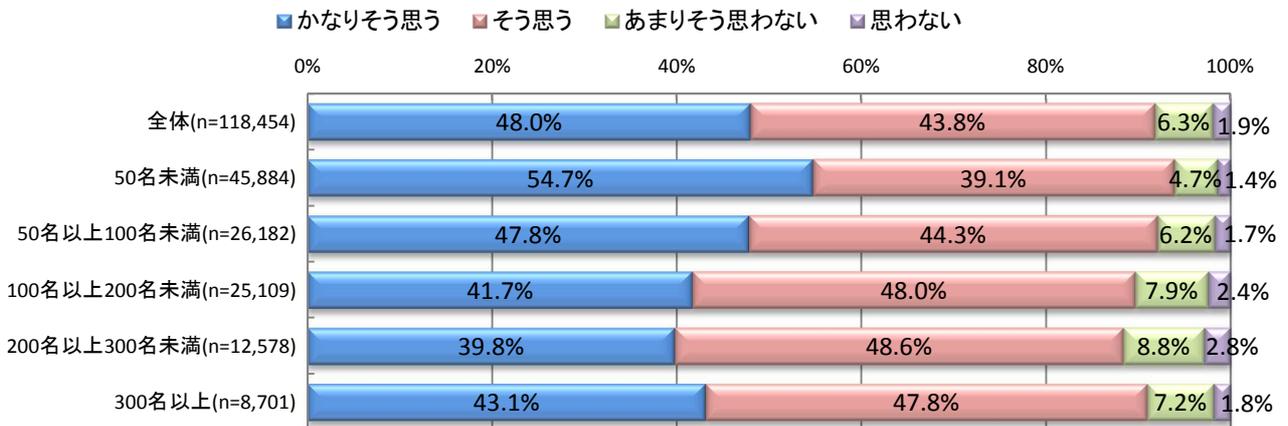
4. 学年別

総合満足度(問H)について、学年別に集計した。「そう思う(計)」は「4年生」が94.7%と最も高く、「1年生」が89.5%と最も低かった。学年があがるにつれ、理解度と同様に満足度も、やや上昇する傾向にある。



5. クラス規模別

全体理解度と同様、「50名未満」のクラス規模で、「そう思う(計)」が93.8%と、最も高い割合を示している。クラス規模が大きくなるほど、満足度は下がる傾向にあるが、「50名以上100名未満」では、全体とほぼ同じ割合に下がり、クラス規模が100名を超えると、横ばいとなっている。また、300名を境にやや上昇している。



6. 科目（授業科目の区分）別

総合満足度(問H)について、授業科目の区分別に集計した。「そう思う(計)」が最も高い科目は、「別科必修」(99.5%)で、最も低い科目は「社会教育主事課程」(84.5%)。その差は15ポイント。

理解度ほどの差はないが、科目によって満足度のばらつきが生じている。

全般的に理解度のスコアと同じ傾向がみられる。

